

人形浄瑠璃

二〇二二年十月地方公演

文楽



【主催】公益財団法人文楽協会 【後援】文化庁 【助成】芸術文化振興基金・朝日新聞文化財団

©青木健二

昼の部

いちのたに ふたば ぐん き
一谷嫩軍記
 熊谷桜の段
 熊谷陣屋の段



夜の部

近松門左衛門作
 野澤松之輔作曲・脚色
 そね ざき しん じゅう
曾根崎心中
 生玉社前の段
 天満屋の段
 天神森の段
深村龍之介提付



令和3年

10月17日(日)

昼の部 13:00 開演 (12:30 開場)

夜の部 17:00 開演 (16:30 開場)

神奈川県立青少年センター紅葉坂ホール

■入 場 料／一般 A席3,600円・B席2,800円・C席1,600円・学生(U25)1,000円(全席指定)

昼・夜通し券：一般 A席6,000円・B席4,500円・C席2,200円

■チケット販売／チケットかながわ 0570-015-415 (10:00~18:00)

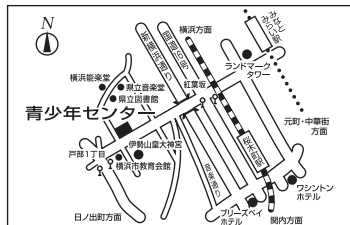
<https://www.kanagawa-arts.or.jp/tc/> ※9/3(金)10時から販売

※夜の部は、JR桜木町駅から会場まで無料専用バスでお送りします。【要予約】
 (詳しくはHPで<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/yi4/dentougeinou/bunraku2021.html>)

■お 問 合 せ／県立青少年センターホール運営課 045-263-4475 (横浜市西区紅葉ヶ丘9-1)

神奈川公演

かながわ
 伝統祭
 能
 伝芸



JR根岸線「桜木町駅」北改札西口から徒歩8分
 横浜市営地下鉄線「桜木町駅」から徒歩10分
 京浜急行線「日ノ出町駅」から徒歩13分
 みなとみらい線「みなとみらい駅」から徒歩20分
 横浜駅東口からバス「戸部1丁目」下車徒歩2分、「紅葉坂」下車徒歩4分



芸術文化振興基金助成事業

二〇二一年十月地方公演 配役表

昼の部

解説（あらすじを中心に）

一谷嫩軍記

熊谷桜の段

豊	竹	芳穂太夫	妻	相模	吉田	勘	彌	
鶴	澤	寛太郎	堤	軍次	吉田	簀	太郎	
熊谷陣屋の段	前	豊	竹	呂勢太夫	藤	の局	吉田	清五郎
		鶴	澤	清治	<small>梶原平次景高 石屋弥陀六 妻は弥平兵衛宗清</small>		吉田	文哉
		後	豊	竹	呂太夫	<small>熊谷次郎直実</small>	吉田	玉志
		鶴	澤	清志郎	<small>源義経</small>		吉田	勘市
			奴	百姓			大	ぜい
			軍	兵			大	ぜい

囃子 望月大明藏社中

夜の部

解説（あらすじを中心に）

豊竹 希太夫

曾根崎心中

近松門左衛門 作 野澤松之輔 脚色・作曲

生玉社前の段

竹	本	三輪太夫	手代	徳兵衛	豊	松	清十郎	
鶴	澤	清	廬	丁稚	長藏	桐	竹	勘次郎

（人形役割）

天満屋の段	竹	本	鍛太夫	油屋	九平次	吉	田	玉輝			
	竹	澤	宗助	田	舎客	吉	田	簀之			
	お	初	豊	竹	藤太夫	遊	女	吉	田	玉	誉
	徳兵衛	豊	竹	希太夫	天満屋	亭主	桐	竹	紋	吉	
	豊	竹	巨太夫	女	中	お玉	吉	田	簀一郎		
	鶴	澤	清	介	町	衆	大	ぜい	い		
	鶴	澤	清	公	見	物	人	大	ぜい	い	
	鶴	澤	清	方							

囃子 望月大明藏社中

一谷嫩軍記

一ノ谷での源平の合戦。「一枝を伐らば一指を剪るべし」と記された制札を、源義経から渡され、若木の桜を守れと命じられた熊谷直実。一騎討ちとなった、我が子と同年輩の平敦盛―実は、後白河院と、熊谷にとって命の恩人である藤の局との間の子―を討ち取りました。

初陣の息子が心配で、武藏国から旅をして来た妻相模。追手を逃れ、偶然にも熊谷の陣屋へ駆け込み、我が子の仇と迫る藤の局。そんな二人に熊谷が語ったのは、子を失った両親の嘆きを思い、組み敷いた敦盛を助けようとしながらも討たざるを得なかった合戦の様子と、敦盛が最期まで母の身を案じていたことでした。

いよいよ首実検。熊谷は、制札に従い敦盛を討つたとして、我が子の首を義経の前に。制札の真意を、「一子を切らば一子を切るべし」、院の子である敦盛を切るなら、自身の子を切れと判断したことは、正しかったのか？あるいは間違いか？熊谷の間に、義経は首を敦盛と認めました。

敦盛は熊谷に匿われ無事。思いもよらない息子の死に慟哭する相模。大切な子を失い、もはや俗世に何の望みもない熊谷は出家を志し、その場で髻を切つて法然のもとへと向かいます。

宝暦元年（1751）、豊竹座で初演された五段の時代物で、今回上演される三段目までを執筆して並木宗輔が亡くなり、残りの段を他の作者たちが補いました。

熊谷が一ノ谷（神戸市須磨区）の合戦で敦盛を討つた話は『平家物語』の中でも有名で、子に死なれる父親の悲しみを思いやり、我が子のような若武者を討たねばならず苦しむ姿が描かれています。そこに、実はそれは我が子であったというひねりを加えた本作では、熊谷の内面により深い苦悩と悲しみが秘められ、「16年もひと昔。夢であったなあ」と、息子への思いが、心の奥から絞り出されるように語られるのが、印象的。悲劇を豪快に描く時代物の代表的演目です。

曾根崎心中

離れては生きていられない二人―醬油屋の手代徳兵衛と天満屋の遊女お初。

徳兵衛は、店の主人からもちかけられた縁談話を断固拒否。ついに破談となり、欲深い継母が知らぬ間に受け取っていた持参金を主人に返すことに。期限は明日。金はすでに継母から取り戻して来てありましたが、激怒した主人に大坂追放を言い渡された身。お初と会えなくなる…。嘆く徳兵衛を力づけ、金を一刻も早く主人に返して怒りを和らげるよう、勧めるお初。

ところが、その大切な金を、徳兵衛は油屋九平次に頼み込まれて貸してやつており、この日になって騙し取られたことが判明。それどころか、証文を偽造して九平次から金をゆすり取るうとした犯罪者にしたてあげられてしまいました。

身の潔白を証明するには死ぬよりほかない…。天満屋へ姿を見せた徳兵衛から覚悟を聞かされたお初は、一緒に死ぬことを決意。深夜、徳兵衛と手を取りあって、曾根崎の天神の森へ。

元禄16年（1703）、竹本座で初演された近松門左衛門の世話物第1作。実際にあった曾根崎（大阪市北区）での心中事件のわずか一月後に上演、大好評を博しました。同時代の題材を扱うことなかった浄瑠璃にとつて画期的な作品です。その後は上演が絶え、昭和30年（1955）に、野澤松之輔の脚色、作曲により、四ツ橋文楽座で復活されました。

店の縁の下に身を潜める徳兵衛が、その上に腰かけたお初の足を手に取り、言葉を交わしあうこともなく、人知れず心中の意を確かめあう「天満屋」。「この世の名残、夜も名残：」、有名な道行で始まり、原作通りではないものの、心中する二人の思いが迫り来る、悲しくも美しい「天神森」。原作で近松がその死を「恋の手本」と讃えた二人の強い結びつきが胸を打つ、海外公演でも絶賛される人気演目です。

観劇当日に発熱や風邪のような症状のある方、体調のすぐれないお客様はご無理なさらず、来場をお控えください。

観劇時は咳エチケットの励行ならびに、マスク着用・手洗い（手指消毒）の徹底などの感染症対策にご協力力のほどお願い申し上げます。

◎字幕表記がございます。席によっては字幕が見えにくい場合がございますので、あらかじめご了承ください。

◎出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくは演目を変更して上演する場合がございます。あらかじめご了承ください。

◎開演中の写真撮影・録画録音ならびに携帯電話・スマートフォン等の使用は固くお断りいたします。